

物容器に記されていた。この井戸は、出土した瓦器碗の形式から一

世紀末から一二世紀前葉と考えられる。

8 木簡の釈文・内容

(1) [永カ] [十カ] 二月廿三日福 [殿カ] [] [] [] [] 061

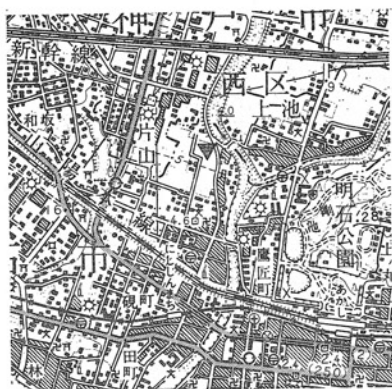
曲物の径は三七・〇cm、高さ二五・〇cmである。一二世紀末～一二世紀前葉で「永」ではじまる年号には「永保」(一〇八一～一〇八四)、「永長」(一〇九六～一〇九七)、「永久」(一一一三～一一一八)の三つがあり、そのいずれかにあたる。

(西村公助)

兵庫・吉田南遺跡

- 1 所在地 兵庫県神戸市西区玉津町・明石市北王子町
- 2 調査期間 一九八七年(昭62)二月～一九八八年二月
- 3 発掘機関 兵庫県教育委員会
- 4 調査担当者 岡崎正雄・村上賢治・平田博幸・高瀬一嘉
- 5 遺跡の種類 郡衙跡・集落跡
- 6 遺跡の年代 三～一三世紀
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

吉田南遺跡は、明石川下流右岸の完新世段丘及び旧河道に位置する。一九七五～八〇年にかけて、神戸市教育委員会、吉田・片山遺



(明石)

跡発掘調査団が、神戸市玉津環境センター建設に先立ち数次にわたって発掘調査を実施しており、弥生時代から鎌倉時代にかけての複合遺跡で、奈良時代後期から平安時代前期にかけては明石郡衙(ないしは明石駅家)に比定される建物群や井戸

墨の痕跡はみとめられるが、判読はできない。木簡の形状は、既報告の兵庫県多紀郡丹南町初田館跡の鎌倉時代井戸出土の呪符木簡四点と似ており、おそらく井戸を埋める際の呪符木簡と推測する。

なお、木簡出土の瓦積井戸は、法隆寺大宝藏殿西側広場井戸SE四八五三や法隆寺東院井戸SE二五〇九の鎌倉時代井戸と似ており、東院の井戸SE二五〇九は瓦が一二〇段以上積まれ、深さも四・一m以上とされ、形状は方形である点を除くと、類似する井戸である。吉田南遺跡の積み上げられた瓦は、吉田南遺跡では屋瓦として使用されたものとは考えられない。平安時代終末・鎌倉時代初頭の瓦が、何故、井戸に転用されたかは不明である。ただ、ある一定期間、数多くの瓦が近くに集積されていたものと考えられ、明石郡衙が衰退していたとしても、播磨国司の東寺再建にかかわる造瓦の力を認めるにおいて、東播系瓦の京への積み出し、管理の拠点として吉田南遺跡が関与していたと考えるものである。

9 関係文献

木簡学会『木簡研究』創刊号（一九七九年）
同『木簡研究』第九号（一九八七年）



（岡崎正雄）

兵庫・小犬丸遺跡

- 1 所在地 兵庫県龍野市揖西町小犬丸
- 2 調査期間 一九八六年（昭61）一月～三月
- 3 発掘機関 兵庫県教育委員会
- 4 調査担当者 山下史朗・山上雅弘
- 5 遺跡の種類 駅家跡
- 6 遺跡の年代 奈良～平安時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



（竜野・上郡）

小犬丸遺跡は、早くから古瓦の出土地として知られ、昭和初期には小犬丸廃寺として周知されていたが、昭和四〇年代になって今里幾次・高橋美久二氏らの研究により、『延喜式』にみえる布勢駅家跡と考えられるようになった。

一九八三年度に至って、遺跡の中央部を横切る県道姫路・上郡線の拡幅工事に際して発掘調査が実施され、築地堀に囲まれた複数の瓦